

「見満ちる小屋」 入澤ユカ(INAXギャラリー顧問)

それは、ミミチルコヤ、「見満ちる小屋」だと思った。

「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2003」に参加した母袋俊也の「絵画のための見晴らし小屋」という作品の中に入り、小さな窓から目の前の光景を眺めたときの、幸福な感情を、今思い出す。母袋の作品は、私のためだけの「見満ちる小屋」に思えた。

ひとり分の幅くらいの三角形の小屋を少し昇ると、1対4くらいの比率の細長い矩形が、目の前や横に開いている。のぞきこむと、遠くの穏やかな起伏の山並みと空と雲、近くの木々の葉がゆれている。あたりまえのどこにでもある風景、時間と思ったとき、喜びがこみあげてきた。母袋のこの小屋というかたちの作品は、ただスリットのような矩形の穴の先には無尽蔵な何億光年分のあらゆるいのちがあり、目の前に完璧な愉悅のかたまりがあることを、託宣のように示していた。

母袋俊也は1978年美大を卒業、1983年から数年間ドイツに留学している。母袋俊也は、ドイツという北方の外国で、母国の障壁画や屏風に向きあうことになった。それら障壁画から着想を得た複数パネルの連携作品を制作しはじめた。この頃は、偶数連結された作品が中心だった。

母袋もまた美術という、見えるけど見えない妖怪に出会ってしまった者で、妖怪の正体を明かさずには生きられない。色、線、かたかが、どんなフレームにあらわれたとき、どんな世界が萌芽し生成するのかわる、まるで物理学の定理を求めるといって描き続けた。

彼自身の手になる図表化された作品年表は、視覚表現という無間地獄で、線や色彩やかたちという経を唱え続けてきた修行僧の記録のようにも見えてくる。

たとえば“TA”系は「横長フォーマット、偶数連結、余白、水平性、非中心性:model日本障壁画」。その数年後、これらと原理的に対峙する奇数連携の作品がはじまり、「奇数連結、中心性、非水平性:model祭壇画」と記される。そして2001年からはじまる“Qf”系は「正方形フォーマット、色彩、筆致、巡回性:model:アイコン」。

その中の連携作品のほとんどには余白があるが、母袋の白は「余白」であり「余白」ではない。その白にこそ「描かれるべき何か」が隠されてあり、やがて時を得て出現するものを仮死状態にして埋めてある気配がする。母袋の作品の余白は、白い檻にも見えてくる。

今展では、細長い画廊横のラウンジにある三つの窓に、直接カットシートを張った「膜窓」から、銀座方向の光景が立ち上がってくる。画廊内には京橋界限をイメージした10mのペインティング。その大作の前に簡易見晴らし小屋ふうな、窓のある衝立が置かれる。

見ると見えないが鼓動のたびに反転し、瞬きごとに図像と余白が入れかわる。母袋の図像はいきている。

あの「絵画のための見晴らし小屋」という、誰も所有できないが誰にもふり注いでいるものをとらえたときに、母袋俊也の作品のすべては、はじまりもなく終りもないところを往還し、時には水、時には空を私たちに注ぎ続ける。